小堀夢情報新聞 ボランティア特集第2号
平成２３年８月30日
発行責任者　小堀道和

小堀夢情報新聞創刊号が大反響を呼ぶ

小堀夢情報新聞創刊号を平成23年６月１日に発行した反響はとても大きく驚くほどのリアクションがありました。

被災地の映像が流れるたびに、何もしないでだまって見ている訳にはいかないと思いながら今まで何もしてこなかったという人の心を動かしました。ドイツの友人までもがボランティア参加を検討したいので教えて欲しいとメールが返ってきました。

宇都宮市教育センター所長は娘さんと一緒に２泊３日の活動に参加し、とても感動したと伝えてくれました。

地元の社会福祉協議会（通称「社協」）の皆さんもとても感激してくれてボランティア経験者による活動報告会で発表して欲しいと勧められました。喜んで参加している内に地元のボランティアチーム発足の話が持ち上がり何と代表世話人であるキャプテンに推薦されてしまいました。

市災害ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ チーム龍JINのキャプテンに選出される

私がキャプテンを快諾した動機は単純です。

石巻市３泊４日のボランティア活動で実感した人間としての喜びを全ての日本人に味わって欲しいという願いが少なくとも町の人に叶えることができる素晴らしい仕事だと思ったからです。

写真はチーム龍JIN発足を伝える地元下野新聞記事（平成23年７月１日）です。

那須烏山
被災地支援ボランティア
有志連携し新組織
東北地方でボランティア活動してきた市民が集まり、連携組織の結成を決めた交流会

チーム龍JINのネーミングについて説明します。

地元那須烏山市にJR烏山線の駅名にまで登場する滝があり、その守り神である大蛇が龍になるという伝説に結びつけて龍神という名称にしようとメンバーから提案されました。　楽しい論議の結果、龍神はユニーク性を重視し龍JINとしました。JINは振り仮名として漢字の仁をあて、TBSの人気番組だった南方仁医師の時空を超えて人を救いたいという熱い情熱と愛情を受け継ごうという志の高い素晴らしいチーム名が誕生しました。

デザインは下記の通り、とてもかっこいいものです。

龍 JIN Ryu 仁　那須烏山市災害ボランティア チーム龍JIN Ryu 仁

詳細は“チーム龍JIN　のホームページを見てください。

かわいい龍JINちゃんマスコット

どんどん進むチーム龍 JIN のボランティア活動

　このようにして市民有志２０名ほどで発足したチーム龍 JIN の活動はポジティブ人間の集まりなだけに驚くほど活動が次々と提案され実行されていきます。

　まず最優先として、未来を担う若者である烏山高校生にボランティア活動の素晴らしさを味わわせてあげる計画です。

　烏山高校長先生にお会いして今回の活動がいかに人間として成長する可能性が大きいかを熱く語り、共感してもらうことで生徒たち、先生方、PTA の皆さんに働きかけてもらい、多くの参加希望者が現れることを期待しました。時期も夏休み期間中で学校のイベントとかち合わないよう調整しました。１、２年生４００名を対象として１０名程度、参加してくれればいいなと参加枠を考えました。

　結果は何と予想とは裏腹に２４名に教頭先生を含む先生４名と我々を慌てさせる人数で急遽バスを増発する結果になり、嬉しい悲鳴を上げました。生徒たちに最高の経験をして貰うために事務局の社協担当者と打ち合わせをし、事前説明会を行い、参加者に訴える内容を確認しました。

それはゴミではなく、私の大切な宝物です

　ボランティア参加者への説明会で被災者サポートの心構えを伝える資料の中で、私も胸を打たれたものがあります。

　一部を紹介します。右の３枚の写真です。

　被災者の目線で活動する大切さを説明するスライドです。泥で汚れたお人形さん、これは「ごみ」ですか？の問いかけに、「私にとってはかけがえのない宝もの」という答えに生徒たちは染み入るようにし一んとして聞いていました。

　さらに事前説明会で驚いたことがあります。

　一般参加者として福島県富岡町から津波と原発の両方を被災した齋藤さんという方が活動に参加してくれたのです。奥さんの親戚がある那須烏山に引っ越してきたのですが何と５回も避難生活場所が変わったそうです。家族が被害を受け、さらに原発をのがれてきたこと、途中でお父さんが不幸にも亡くなられたこと、お葬式も納骨もできない状況を話され、それでも「同じ苦しみを持つ仲間を何とかしてあげたい」と参加の動機を紹介してくれました。

　一般の人も高校生も余りの凄さにさらにし～んとしてしまいました。事前説明会だけでも、こんなに人の心を打つボランティア活動に感動しました。そして、高校生を含み５５名、バス２台で７月３１日朝３時に

宮城県七ヶ浜町に向かって出発し、チーム龍 JIN 発足後、初めてのイベントがスタートしました。

チーム龍 JIN 発足後初の宮城県七ヶ浜町ボランティア活動

出発後まもなく、不運にも震度５の地震があり、一部高速道路が閉鎖されてしまうハプニングがありましたが、現地に早めに到着しました。

途中、仙台東部高速道路から見える被害のひどかった仙台市若林区荒浜地区の景色は写真のように４か月以上経過し、かなりきれいになっていました。

５月連休時の仙台市若林区荒浜地区の様子

しかし, 今回被災地を初めて見る高校生にとっては、とても衝撃を受けた光景でした。

7月末の同上の様子

感想文には七ヶ浜町の景色も含めて「津波の破壊力にテレビ画面と違う生々しい惨状に絶句し言葉を失った」と書いています。

七ヶ浜町ボランティアセンターでどんな作業を受け持つかを決める朝一番のマッチングというミーティングで私たちは、主に海岸近くで基礎部分だけが残り全て流失した３家屋の砂出し作業を任されました。

写真は下野新聞に掲載された高校生の作業の様子ですが、多くの人数で取り組んではじめて成果が目に見える、労力を要す地味な仕事です。それでも、高校生たちの感想は「とても大変だったけどきれいになったのを見て嬉しかった」と達成感や満足感を書いています。

地元下野新聞写真

被災地支援バス 初運行

那須烏山の「チーム龍JIN」

家屋の砂出しに高校生も

津波で流された民家で、砂を土のうに詰めて後片付けする烏山高校生たち

平成２３年８月２日

しかし、この作業は本当に必要なのかという疑問が一部の一般参加者から出ました。きれいに砂を除いた後, 本当に家を建てるのだろうかと思える程、周辺が津波に破壊されているのです。

ボランティアセンターのリーダーにお伺いして、納得しました。

ボランティアセンターのスタッフたちは、全流失した自宅を離れ避難生活をしている人たちに声を掛けて、安否も含めて話を聞き、再び故郷に戻って家を建てようと考えているかどうかを尋ねているそうです。

もう見たくも帰りたくもないと答える人もいます。再建して住もうと考えているという人に対してボランティアの人たちが砂を出し基礎工事段階のレベル近くまできれいにしてくれますがお願いしてみませんかと

声を掛けるのです。余り積極的に気乗りはしないまでも、それでは頼んでみようと答えた人がボランティアの人たちの砂出し後のきれいな自分の家の様子を見て「再び建て直してみようという元気と勇気が湧きました。ボランティアの皆様にありがとうと言ってください」と話してくれるそうです。

この嬉しい言葉に励まされてボランティアセンターのスタッフたちは一生懸命被災者の方々に電話をかけ続けているそうです。今回ボランティア活動に参加してくれた那須烏山市の皆さんに「本当にありがとうございました」と依頼者になり代わって伝えて欲しいと話されました。

このような経験は現地に来ないと絶対味わうことはできません。

七ヶ浜町はとても小さな町なので、お昼はボランティアセンターに戻ってきて食事をとるルールになっています。現場にはトイレもないことも理由の一つです。センターに戻ると別の団体がボランティアさんを対象に焼肉丼の炊き出しをやっていました。温かい配慮と味のうまさに満足しお礼の言葉にも力が入りました。午後も継続して砂出し作業に取り組みましたが、さすがに高校生には辛いものがあったようで痙攣してしまう者や貧血になってしまう高校生が出て心配しましたが、怪我人も無く終了しました。

ありがたいおいしい昼食炊き出し

ガレキ処理は心のガレキ取り

ボランティアの仕事には様々なものがあります。ガレキ処理や砂出し作業などの大人数に適した団体活動では、被災した人との直接の交流機会が少ないのです。実際に大変辛い思いをした人の話を聞いてあげるだけでも心の支えになることを個人で参加した石巻市のボランティア経験で学んだ私は、積極的に心の交流の場づくりに努めました。

全員での流出家屋の砂出し作業の様子

ボランテイアセンターでのマッチング時、「今回は地元の烏山高校生をたくさん連れてやってきました」と挨拶したことで、七ヶ浜町の方が地元の高校生であるＩちゃんを連れて「せっかくの機会なので烏山高校生と交流させてあげてください」と訪ねてくれました。

Ｉちゃんはとてもチャーミングな高校２年生で震災後の話をしてくれました。私たちの砂出し作業をしている隣の浜に住んでいて家など全て

流失してしまったことや被災当日、高台に避難した次の日、水が引かず自衛隊のヘリコプターで救出されたこと、８０歳のおばあちゃんがいたので大変だったこと、何度も住む場所が変わり現在は仮設住宅にいるも家族が一緒でないこと、夏休みになったので役に立つことをしたいと今日初めてボランティア活動に参加したことなど一生懸命説明してくれました。

七ヶ浜町のＩちゃんと一緒に

聞いている内に胸が熱くなりましたが烏山高校２年生女子のグループを紹介し仲よしになって欲しいとお願いしました。午後から仮設住宅のマッサージサービスの補助兼話し相手という仕事に巡り合い、Ｉちゃんと烏山高校生のグループは元気に出発しました。帰ってくる頃にはすっかり仲よしになり仮設住宅のボランティアがとても楽しく充実していたことを嬉しそうに話してくれました。

マッサージ時の話し相手もそうですが、被災した人の話を聞いてあげることで心に引っかかっているものが取れ元気になれるとＩちゃんが話してくれたように、表現が適切でないかも知れないが心の交流は心のガレキ取りだと思えます。それと同時に心の交流が図られていると思える時に感じる嬉しい気持ちは神からの素晴らしい贈り物ではないかと思えます。キャプテンとして直接交流が図られるこのような機会をたくさん作ってあげたいと思います。

ボランティア活動後のアンケートの紹介と活動まとめ

活動後の感想・アンケートは、帰りのバス内で思いの丈を書いてもらいました。一般参加者も高校生もボランティア活動で個人の成果は小さくてもみんなで取り組んで大きな成果がでたことが嬉しかったと満足感や達成感を書いてくれました。ほとんどの人が、日程が合えば次のボランティア活動にも参加したいと意思表示してくれました。特に高校生が希望していることに感動しました。

55名全員での活動後思い出の一枚

今回は高校生の参加について、チームとして未来を担う若者にぜひこの現状を知ってほしいということと人のために働く喜びを経験して欲しいという願いを持って企画しましたがその意図は十分に達せられたと思います。少しでも被災した人々の役に立ちたいという気持ちを持った若者はまだ多数いると思うので今後もこのような機会を可能な限り企画していきたいと思いました。

チーム龍 JIN のキャプテンとしてこれからも成長するチーム運営をしていきたいと思います。読んでいただいている皆様の応援と参加を願っています。